

酷熱に沙漠の横断だから、いかに暑熱に苦むかよくわかる午後五時又は夜に入つてから出發してゐて日中天幕の中で茹だつた様子など想像以上であるらしい。ゴビの沙地の中で、加ふるにブランといふ暴風にあひ、鹽辛い池水を飲むだり洗面しなかつたり、駱駝でなくてはとも通れる土地ではないと見える、おまけに強盗團に出逢ふ、やうやくにして歸郷に安着したうれしき、読む者も同情が出来る。(藤田)

○外蒙古地誌上下二卷

南滿洲鐵道株式會社
昭和十年十一月十二日發行

本書はイルクーツク軍管區司令部發行的「接壤地帯兵用地誌」第二卷蒙古の翻譯で參謀大尉ハルモフ編著一九一四年に出たものである、第一篇全蒙概觀第二篇東部地區概觀が上巻で下巻は喀爾喀と科布多の兩地區にわたる、歴史方面では成吉思汗以後の經歷をやゝ詳述し住民の分布に及び軍事の見地より見たる蒙古の經濟状態は餘程詳しくのべてある、本書の東部地區では興安嶺をこえて滿洲に出る道路交通を明にし、甘珠爾、洮南、ドロンノル等の位置を明にしてある、勿論、これはロシアからの兵用の記述であつて、滿洲からの考察でないから參考として他山の石とみるべきであらう。經濟地理としては牧畜と農作物以外に多數の鐵産もあるであらうが、それは一語も述べてないのが不十分である。

下巻の方も交通線路は詳述されてゐるが地誌の經濟的方面は牧畜と農産以外に出でない。(藤田)

○黒河の河運

昭和十年黒龍江の解氷は四月廿三日に始

まり五月五日流水開始、十一日から航行が出來た故に二十一日にハルビンから汽船が黒河港についた。黒河の河運はハルビン黒河間と、富錦黒河間上流では黒河漢河間、漢河と奇克特間、及び漢河奎華間の五線であつて、各線共專屬船を配してゐる。總數二十二隻、十年着延船數二七四隻に達し來往客二萬三千三百餘人、主として探金の苦力と出稼の江岸農民で、黒河への移出入貨物は百八萬四千布度に達しメリケン粉、雜貨を入れ、木材・木耳・紅豆・毛皮を出だす。いづれも額は少い十月二十一日哈爾濱黒河間終航、黒河奇克特は十月二十五日終航。

水運による運送費は鐵道便よりも多少低廉であるから最近汽船の利用が進んで、鐵道方面にも幾分の影響を與へるに至つた。結氷中黒河への驛到着貨物は毎月二千布度内外のものが、水運開始と共に約半減したといはれる。乗客は主として黒龍江沿岸住民及苦力の移動で、水運が開けると山東及南滿方面からの苦力の來往頻繁となる。これらの苦力はすべて鐵道で黒河に來り、それから、更らに水運でモーションをとるから、解氷期間は鐵道にのるお客の數が増加し好影響を與へる。

結氷期の黒龍江沿岸各地方は極以外の交通機關は全然杜絶

する。つまり冬籠りになる。すると物價は一時に騰貴し各地間との商取引・旅行・通信等頗る不便になる。従つて經濟的・精神的に不利を蒙るのであるから、夏期汽船の運行中に一年中の取引をすまずといふ傾があり、又さうするやうに沿岸住民も努力してゐる。

鐵路總局黒河自動車營業所では黒河環軍間の乗客貨物の運行をしてゐるが、汽船運行となると、自動車の乗客は全く杜絶してすべて船にのる。故に結氷期のみ自動車が動くことになつた。

黒河の埠頭は一隻の船がつかねる程度であつたから昭和十年六月から着工して、鐵道引きこみの大埠頭に於て十一月一日竣工、全長百二十米、三隻乃至四隻の汽船がよこづけになるもので、本年度解氷期以後は盛んになるであらう。目下黒河に冬營中の汽船は五隻に達し、軍艦大同號（松花江々防艦隊所屬）一隻が同じく繫船してゐる。

○英國工業原料の統制

一九三三年に於ける英國の工業原料及び未成品の輸入額は一億八千萬磅に上り内六割三分を諸外國から仰ぎ三割七分を英帝國領土内から仰いだ。してみると大英帝國の如き大を以てしても關稅障壁や割當制で自分獨りよい子にはなれない。世界の他の諸國の自由の取引の恩恵がいかに大きいかを考へねばならない。故に英外相ホーアは一九三五年に原料を要求する諸工業國間に原料の自由分配方の必要を絶叫するに至つた。保護關稅一點張りでゆく

と結局は英國のためにならぬ。もし英國が棉花をアメリカから買へぬやうになつたらどうするか、事實印度その他で棉花は三千四百萬磅を輸出したもので、内日本や支那が買ひ取つたもの、十二分一しか英本國は購入しなかつた。（一九三一年度）濠洲の羊毛でも三千三百萬磅の輸出のうち英本國は僅に一千萬磅であつた。さうして残りの大部分は日本及び獨逸に仕向けられたのであるから、もし日本が印度綿と濠洲羊毛を買ひ取らなかつたならば、大英國はいかに困難に遭遇したかもしれない。現に英本國に生産する原料でも輸出四千六百萬磅に達するが、（これは主として石炭と羊毛である）そのうち六百萬磅だけしか英領には仕向けられず、残りの大部分は諸外國の購買に依存してゐるのである。かうした事實を考へて英國内だけの關稅障壁をつくるといふことはあまりに無鐵砲な時代になつたのではないか。カナダの木材輸出でも四千七百萬磅のうち英本國は僅に五百萬磅を買ひ取つたのみで大部分は米國と日本に仕向けられてゐる。

一方英國で消費の原料がすべて植民地から充足しうるかといふに決してさうではない。一九三三年中英本國は其所要の皮革の僅に六分五厘をその植民地から輸入したにすぎず、錫は所要の三割、礦油は一分四厘、コブラは二割しか英植民地から輸入するに止まつたが椰子及椰子油だけは八割まで其植民地から入つた。してみると自由に原料は分配されることが自他の利益であつて、割當制限は決して英本國の利益にはなら

ない。もしアルゼンチンからの食料や原料の輸入を抑制したら、今度はアルゼンチンが英國其他の工業品を購入する力が減殺される。天に吐いた唾は顔にかゝるといふのがこの事である。

故にホーア外相は原料統制といふ見地から國際貿易上の障礙をさげることが、たとへ困難であるとしても、どうしても早く實現されるやうにしたものだとのべた。これは理由ある正當な見解である。徒らに保護貿易を死守することは、その國のためによいことではない。

○南阿聯邦の經濟事情

南阿は農・鑛兩業を基本經濟とし製造業を第二次とする。白人が獨占の高給俸給と賃銀をと、土人有色人種の過少なる低賃金労働を根幹とする。一九三二年末南阿の金本位離脱以來國內の金銀業は俄然旺盛となつたけれども、農業は世界的不況と引きつゞいて各國の經濟國家主義の影響で農産物の價格が上らないので農村の經濟は思ふやうにならない、保護關稅、輸出補助などをやつても窮境を脱しない。一方政府は製造工業を關稅改革で保護するために、國內生活費は甚だしく高價となり、都鄙の均衡がとれない。つまり農産奨励のためには製造工業の助長を保護することをやめて、國內物價を低くせねばならない。一方工業を盛にしようと思へば農業救済のために更に多額の支出をしないでならぬといふデレンマにかゝつてゐる。そこで農産物は外國市場に依りなしないで、國內消費にかへやうと考

へるためには、一般に低賃銀で労働してゐる土人の賃金を向上しやうとする。もしこれらの土人の賃銀を上げたならば、鑛業會社の利益がそれだけ低落するといふ患がある。これは南阿經濟自身に無理があるわけ、現在のやうである小麦玉蜀黍・牛乳製品・牛肉等は統制委員會があつて輸入禁止的關稅をかけてゐるから、小麦などの國內價格は世界市場の夫より二倍以上の高さに上り、一方補助によつて輸出される農産物は國內よりも外國で安價にうられるといふ矛盾が生じてゐる。そこで都會在住者は政府の農業保護の過大を指摘し生活費の低減を要求するが、一方農村は其窮狀を訴へて國內製造工業關稅保護こそ生活費を昂騰するのだからこれを輕減して農村の直接補助をしてほしいといふやうな鹽梅である。蓋し農業は南阿の産業としては最重要なるものゝ一つで全人口の七割五分までは田園地方住民であるが、羊毛のごとき南阿第二の重要物産も一九三二年に旱魃のため大多數の羊が死滅したこともあつて三十二億封度の年産が一九三四年には二十一億封度に激減した。其他玉蜀黍や小麦の如き國內價格が高くて輸出が出来ない。さうした時節に南阿經濟の好轉したの

は全く産金の結果である。

南阿の金鑛一九三二年金本位離脱後、金の價格の騰貴となり一オンス約四磅五志のものが一躍七磅になつたから金鑛開發が旺盛となり、政府は超過利潤稅として平均五割を課稅し其利潤殘額を以て貧礦の開掘に着手せしめた。そこで四・五

年前迄は二、三十年の壽命だと思はれた鑛山も四、五十年の生命を延長しヨハネスブルクでは一九三二年に三千五百萬噸の鑛石を碎いたが一九三四年には四千萬噸の多きに達し純金採取量は一千一百四十萬オンスから一千萬オンスになつた(貧礦に着手したから、純金量は減じた。しかしこれで世界金産額の約四割、世界第一位をしめたのである。かくて一九三五年六月末には白人就業者三萬四千四百人に達し土人三十萬人といふ歴倒的多數をしめた。さうして土人は一年賃銀四十磅内外といふ安値であるから、南阿の金鑛は全く土人の低賃銀によつて發達したといへる、一九三六年には月平均純金産額百萬オンスに達するといふ勢である。南阿の人々はかうした景氣から、土人の低賃銀を利として更らに石炭・銅・錫・プラチナ・銀其他あらゆる鑛物資源の開發に熱中してゐるが金鑛以外の就業者は金山の二割にしか達しない。世界に有名なダイヤモンドは價格が世界不況で以前の半額に下落した、一九三五年以來全部休止、發掘中止となつてしまつた。一九三六年の夏にもなれば再び着手されるかもしれない。各種勞働者の數は左の如し。

金 鑛	二九九、九五四人	八一・七%
ダイヤモンド	二六、三八七	七・二%
炭 坑	二五、三三九	六・九%
其他鑛山	一一、〇三〇	三・〇%
石山及雜	四、三二八	一・二%

要するに南阿は黄金景氣を中心にして土人の御蔭で元氣があるといふべきであらう。

○英帝國內の棉花

英領のうちで印度は百八十萬平方哩

人口三億五千萬の大國で、年々棉花五百萬俵を産する。この印度棉のうちランカシア向のものは、オムラス・ブローチ及びアメリカン・パンジャブ等長纖維のものに限り、一九三四年度に僅に四十萬俵を輸入したにすぎないから其大部分は日本支那へ輸出すると同時に國內消費に供される。西印度の棉花は主としてシーアイランドの高級品であるが、これは三千六百俵位を英國に輸入する程度に過ぎない。つぎに蘇丹の棉花は希望は大きいけれども、一九三四年に十五萬六千俵しか收穫されなかつた。一九三五年に二十三萬俵に達しなかつた。それよりもウガンダの方が成績がよく年々三十萬俵を産する昨年は氣候不順のために二十八萬五千俵しか出来なかつたが其七割は印度へ二割は日本へ輸出され、英本國へは七分しか輸入されてゐない。印度へ多量の輸入は、印度が細糸をつくるやうになつたからである。タンガニカカの棉花收穫高も豫想を凌駕して三萬八千俵の新記録をしめた。主としてウガンダ棉を植栽してゐる。ニヤサランドでは英帝國産棉地中最少面積に栽培されて一萬三百六十八俵を産した。ニヤサ湖畔の低地につくる。轉じてニジエリアをみると勿論可能性はあるが、三萬俵位しか收穫がない。時によると六千俵に止まつた記録がある。ケンヤ植民地では發展面白からず二千五百俵位

であり、南阿・ローデシアなども餘り主要でない。

濠洲では二萬俵位は出来てクインズランドに限られてゐる以上アフリカ各地を主要地とみて棉花收穫を考察すれば、到底北米合衆國の敵ではない、しかし英國棉花栽培協會は何とかして自國內での自給政策をとりうるやうにと努力してゐることは誤りがないと見られる。

○佛領印度支那の糖業

天工開物を讀むと甘蔗に二種あつて一を果蔗といふ。截斷生噉するが糖を作ることが出来るが形は竹に似て大である。蔗蔗といふのは糖蔗といふべきで口で噉むと唇香をやぶるから之は食はないで、白霜紅沙を作るとある。元來蔗は支那にはなかつた、唐の大曆年間（代宗西紀七六六）に僧鄒和尚が蜀に遊んで其法を傳へたといふ。我國では鑑眞和尚が果蔗と蔗糖とを將來したのが最初で天平勝寶四年（西紀七五二年）に既に沙糖を知つたが、本草綱目をみると江・浙・閩廣・湖南・四川いづれも甘蔗をつくるが、多くは生で噉んだもので沙糖に作ることは稀であつたらしい。同時に安南の産が支那よりもよかつたことは果物志に甘蔗は遠近皆有り、交趾産する所の甘蔗特に醇好とのべたことによつても證される。そこで現在の佛領印度支那はやはり糖業の本場となつてゐるが、東京地方ではミヤ・ジャン白蔗、ミヤ・ウニ黄蔗、ミヤ・チャー赤蔗及ミヤ・ジェ薄黄蔗の四品種をつくる。これは右の竹蔗・狹蔗・崑崙蔗など、いつた古品種を各々そのまゝに傳へてゐるもので、

土人の生食用が多い。蔗作面積は四千八百町歩、一町歩平均八噸位であるから貿易にはならぬ。ついで安南でも生食用及び沙糖製造用として到る所に蔗作してゐるが、民家の附近にあるものは主として生食用である。蔗作面積二萬町歩であるが雨季の終る頃に植ゑ付け、成熟に十二ヶ月を要する。雨季は南北で時を異にするから收穫も時を異にし北は一月より三月南は三月から五月に收穫する、甘蔗の後に米又は甘藷を輪作する。

土人はミヤ・ラウ種を以て（支那甘蔗）糖汁を作る。

製糖方法は極めて幼稚で木製壓搾機を使用し牛を用ひる。嚙昔の讃岐のやうである。糖汁を眞鍮鍋で熱し沸騰中に泡が生じ不純物は表面に出る。これを漉したものがシロップである。淺汁に更に糖汁を入れて煮沸して同じ方法を繰返す。この得たる糖水を土器にうつし、木片で強く攪拌し凝結せしめる。それが粉糖又は角糖で茶褐色である。産糖高は甘蔗重量の約五分である。又糖水を圓錐狀の土器にいれ少量の水と粘土と壓力で白砂糖をつくる、糖水の三割から六割とれる、その残り二割は黒砂糖で、最後に糖液がのこるとこれをアルコール製造者等にうるか、眞黒砂糖にする。

白糖を容器にいれて鶏卵を加へ煮沸しながら強く攪拌しトロ／＼にとけたシロップを他の容器で冷却結晶させて氷砂糖をつくる。砂糖の取引は主として華僑の手中にある。

交趾支那ではメコン流域で蔗作するが主として土人生食用

である。土人栽培の小面積の作物が多い、ドンナイ地域、西貢流域、グイコ河畔の三地方に多く、耕作に乾作と水作とがある。栽培者の多くは製糖所を所有し其數六百二十に達する。五千八百町分の甘蔗を材料としてゐる、塊糖と板糖とを主として作る。塊糖は板糖よりも良質で高い。蔗作は米作よりも多くの資金を要する。植蔗一町歩は一〇〇弗の抵當に匹敵する。

東京は生産が少ないから安南から輸入する。産額六萬キントルに過ぎず、安南は三五萬キントル主として褐糖で支那雲南へ輸出する年額四萬キントル、其他印支各地へ八萬キントル褐糖であるが、目下輸出しない。却つて多額を輸入してゐる。糖業發展の阻害の事情は一般の不景氣と砂糖價格の下落と、ゴム栽培へ轉じたこと及び洪水の爲に蔗田が多く米田になつたからであつた。

印度支那には糖用椰子がある。植付から二十五年をへないと糖がとれない。幹の高さ十五米乃至二十米花實は其頂上に結ぶから長い竹梯子で登つて十一月頃花がさき實が結びかゝるとき木についた儘の花實をつぶして汁を出し、容器にいれて保存する。醱酵しやすいため、朝早く木に登つて汁をとりに、七日間醱酵し、汁には醱酵止を入れておく、取つてから糖汁を鍋にいれて、枯草をもやして沸騰せしめ其容液が半分になつたとき火を消して放つておく。外に鑄型があつて冷えた頃をみはからつてこの型の中へいれて凝結させると、これを

パンといつて十個づゝ椰子の葉に包んで賣る。又椰子糖水で土人酒も出来る。東埔寨又は交趾支那に繁生してゐるから將來これからアルコールをとるやうになるであらう。

ジャバ糖や臺灣糖の進出によつて、安南の砂糖もいつまでもかやうな原始産業ではありえないことゝ考へられる。

〇ペリユー對日貿易

一九三三年以來本邦品の進出著しく一九三四年には邦品輸入總額一千二十二萬ソールにて前年度の二倍、前々年度の八倍に躍進し本邦向輸出は五百八萬ソールで前年度の五倍、前々年度の十四倍にもあつたから貿易の均衡といふ點からみて好都合に進展してゐるといへる。

當國輸入國としては米、英、獨の三國がリードしてゐて米國第一位二六・八%をしめ、英國之につき一七・二%獨逸九・%佛國八・四%日本五・九%で第五位である、日本からの輸入品は綿と絹をはじめ麻及毛織物等の進出著しく、最近ガソリンと棉花を本邦へ輸出して好況である、日本からペリユーへの輸出品は右の織物の外各種類の雜貨に及び品目三百八十二種は五百ソール以上を上り、ペリユーにて競争上首位をしむるもの獨逸品九十七品、日本品八十七品、米國品八十六品、佛國十三品、其他四三品で本邦は獨逸品と競争の途上にあるわけである。